

ジカウイルス感染症

立春も過ぎ、14日には関東地方にも「春一番」が吹き、東京都心では最高気温23度を記録するなど暖かな日となりました。休み明けの月曜日には一転寒気が流れ込み、2月らしい気候に逆戻りしましたが、日一日と春の近づきを感じます。ウィンタースポーツはシーズン終盤を迎え、スキーノルディック競技では、ワールドカップを転戦するジャンプの葛西選手が3試合連続で3位に入り、自身の持つ最年長表彰台記録を43歳8ヶ月に更新、19歳の女性ジャンパー高梨選手もワールドカップの連勝記録を更新する10連勝を飾り、14戦を終えて11勝と圧倒的強さを見せています。

さて、政府は2月5日に感染症法に規定する四類感染症として「ジカウイルス感染症」を追加する政令改正を公布し、15日から施行しました。

ジカウイルス感染症（ジカ熱）は、デング熱や日本脳炎と同類のフラビウイルス属のジカウイルスによる感染症で、ネッタイシマカやヒストシマカなどが媒介して人へと感染します。デング熱ほど強い症状は示さないものの、軽度の発熱、頭痛、関節痛など似た症状を示しますが、不顕性感染も多く、8割程が症状を示さないとも言われています。日本においては、これまでも外務省が感染症危険情報を発出して渡航者及び滞在者に対する注意喚起を行うとともに、検疫体制の強化や医療機関への情報提供等を実施して、ジカウイルス感染症の防衛に努めてきています。

ジカウイルス感染症については、昨年の5月以降、ブラジルをはじめとするコロンビアやベネズエラなど中南米地域を中心に感染者が多数報告され、さらに11月には、ブラジル保健省が小頭症の新生児からジカウイルスRNAを検出したとして、ジカウイルス感染症と小頭症との関連の可能性が疑われることを発表しました。現段階では胎児（小頭症）への影響との因果関係は明らかでないものの、米国CDCや欧州CDCは流行地域への妊婦の渡航を控えるよう通告しました。また、WHOは2月1日に緊急委員会を開催、小頭症及び神経障害の多発について、「PHEIC（国際的に懸念される公衆の保健上の緊急事態）」に該当すると宣言しました。8月にリオデジャネイロ五輪を控えるブラジルでは、ルセル大統領を先頭に内閣・軍をあげてジカ感染症の撲滅に取り組んでいます。

こうした中、政府は9日に第3回の「国際的に脅威となる感染症対策関係閣僚会議」開催し、エボラ出血熱など国際的に脅威となる感染症への対策を強化する今後5年間の基本計画を決定しました。基本計画では、「開発途上国感染症対策強化」、「国際感染症対応人材育成・派遣」、「感染症危機管理体制強化」など5つの重点プロジェクトを掲げ、これらの取り組みを進めて国際社会での責

任・役割を果たすと同時に、国民の安心・安全の確保に万全を期すとしています。

感染症の脅威を無くすのは容易なことではありませんが、その実現に向けてしっかり取り組んで参りたいと思います。